様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７２００３２

研究課題名（和文）近代日本における生命言説と新旧宗教運動に関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical study about the discourse of life and old and new religious movement in modern Japan.

研究代表者
大西　克明（OHNISHI, Katsuaki）

東洋大学・東洋学研究所・客員研究員

研究者番号：３０４５９８３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,100,000円、（間接経費）　630,000円

研究成果の概要（和文）：近代日本の宗教運動において「生命」はどのような文脈で語られてきたのか。それは、近代化への反省を契機として語られる「いのちの生成原理」としての民俗志向的な文脈と、近代への適応戦略として現れる生命科学への期待感を含み込んだ科学志向型の文脈に大別される。また、新宗教教団においては、教団ライフコースに応じ、両者の文脈の出現が異なる。近代における生命言説は、農耕心性を表す言葉のみならず、科学への志向をも包摂した両義的なものであった。

研究成果の概要（英文）：In this study, I would like to discuss how the discourse of life functioned in modern Japanese religious movement.There were the two contexts in it. One is folk customs context and it means anti modernization. Second is scientific context and it means the adaptive strategy to modernization and the hope for life science. Moreover, in a new religious movement, an appearance differs in both context according to these life course. The discourse of life in Japanese modernization included not only farming mentality but the intention to science, and was ambivalent.

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：宗教学

キーワード：生命言説　宗教運動　宗教社会学　伝統宗教　生命科学　生命主義的救済観　仏教系新宗教　法華系宗教

１．研究開始当初の背景

（１）我が国の近現代における宗教運動の教説に「生命（せいめい／いのち）」言説が横溢し、救済の説明原理として機能していることを新宗教運動に即しつつ明らかにした論文として、對馬路人・西山茂・島薗進・白水寛子「新宗教における生命主義的救済観」（『思想』№665、1979 年）がある。

この論文では、新宗教は伝統宗教（民俗宗教を含む）との連続性を保ちつつも、その独自な救済観としての「生命主義的救済観」が提示されるに至った。その特質は、宇宙全体を一つの衰滅することのない生命体とみなし、人間をその絶えざる生命施与の働きによって生かされている存在と捉え、両者が調和し合う互恵的な関係を実現することで、人間の全体的生命開花を目指すといった救済観である。ここでは、このような生命原理を用いた教説を、宗教における生命言説（宗教的な生命言説）としたい。

さて、上記の論点は宗教研究のみならず日本思想史にも一定の影響を与え、近代日本の宗教の救済観の特質として楽観的な生命原理が働いていることの論証のもととされてきた。だが一方で、各々の宗教がどのように生命言説を構築したのかについては不問のままであった。例えば、仏教系新宗教は伝統仏教の救済財を活用しつつ隆盛したが、伝統仏教にはそもそも「生命」という語彙（仏教用語）は存在しなかった。ではなぜ、新宗教は生命という言説を使用するようになったのか。この問いへの実証的研究はこれまでなされてこなかった。すなわち、生命言説はあたかも我が国固有の宗教伝統であり、新宗教はそれらの伝統を近代日本という時代社会で再生させたと考えられてきたのである。伝統宗教も近代以降は生命言説を用いる場合があるのでその関連性は複雑ではある。しかし、生命という語義自体が、明治初期に“Life”の翻訳として創出されたことを考えると、新旧宗教が近代社会への応答として、生命言説を摂取していった蓋然性も高いと考えられる。

（２）日本思想史では、文芸作品における生命言説の内容分析・解釈から研究がなされてきた。鈴木貞美（『生命観の探求』作品社、2007 年）によれば、“Life”の翻訳としての「生命（せいめい／いのち）」は天賦人権論の文脈で使用されていたものが、知識人の間で変容していく様相が明らかにされている。

つまり、19 世紀の実証主義に基づく、目的論・機械論による自然征服観に対する思想として「生命」が語られ、無機物質に還元されない生命現象を万物の説明原理とする言説であった。原生命力を賛美する思想傾向であり、近世の自然形而上学とは異なる、生命を存在の根源、普遍的原理とする言説であるという。しかし、これらの研究成果は宗教研究には接合されず、宗教研究における「生命主義的救済観」との関係性が明らかにされてこなかったといえる。本研究は、このような背景を念頭に進められた。

２．研究の目的

（１）本研究では、旧宗教（伝統宗教）と、近代以降に誕生した新宗教が、それぞれどのように生命言説を構築していったのかについて、比較検討を行なう。前者においては、具体的には特に、仏教教団における救済原理を検討しつつ、そこにおいて、生命言説がどのような文脈で語られたのかについて分析する。伝統仏教における宇宙観・世界観は「空観」からの影響が強いが、近代においてそれがどのように、あるいは、いかなる語彙で表出されたのはについて明らかにする。

（２）次に、伝統宗教ないしは我が国の民俗性との連続性が濃密である新宗教教団の教説を検討し、いかなる文脈で「生命」が言説かされたのかを分析する。その上で、伝統宗教との共通性と差異性を考察し、新宗教がどのような面で独自性を有していたのかについて探究する。

（３）上記の研究を通して、近代日本における新旧宗教が、生命言説を時代状況との連関で、どのように摂取したかが明らかにされる。

３．研究の方法

（１）伝統宗教のなかでも特に、教理面において近代への応答を余儀なくされた諸教団を抽出し、教説において「生命」が言表された文脈を精査する。

生命というターム自体が、明治期に創出された語彙であるとこを踏まえれば、生命言説は「近代」との応答関係から捉えるのがふさわしい。複数の教団を比較し、典型例と考えられる教団を選定し、細密に検討していく。

（２）新宗教においても同様に、生命言説の文脈を検討する。伝統宗教（旧宗教）との新宗教の差異が、「教え」の大衆性の有無にあるとするならば、「生命」が新宗教において大衆性をもって語られる相があると考えられる。

（３）新旧の宗教における生命言説を比較考究することで、生命言説の多層性を明らかにしていく。

４．研究成果

（１）近代日本の宗教運動と生命言説の関連性として、以下のことが指摘できる。まず、

生命言説は前近代における諸宗教の説明原理ではなかった点である。それはむしろ、「カミ」や「仏・ホトケ」、「いのち」であった。そもそも、生命言説自体が明治期に創出されたものであった。明治期以降もそれは継続していた。なぜならば、生命という語彙は、明治期において終始一貫したものではなかったからである。

例えば、生命（Life）が「人生」という文脈で語られる場合もあれば、機械論的自然観への反テーゼとして唱えられて、非合理的要素を強調する文脈で語られる場合もあった。さらには、近代的な生物学における「生命科学」の文脈で、生物と無生物の境界として語られる場合があるなど、複数のコンテキストで語られていたからである。

ここから、生命言説の摂取は、機械論的自然観への反発や、生命科学への期待感という、両義的な意識のもと、各教団が主体的に選択した言説であったといえる。

元来、「生命」は、明治初期に「Life」の翻訳として定着したものであった。当初は、「人生」の意味が付与されたり、「人権」を含意するものとして使用されたが、明治後年に至り、明治近代化の反省から由来する反機械文明の文脈で言説化されるようになり、トルストイやベルクソン等の、いわゆる「生の哲学」の流行と並行して、「生命」は、今日の観念と同じような「いのちの生成原理」として語られるようになった。ここには、機械文明への反省が、当時の新しい西洋哲学の思潮と共振する面があると同時に、民俗的な「生成の原理」を自覚させるような効果を持った面が両存していた。これらの思想史的流れを念頭に置き、旧宗教（伝統宗教）に生命言説を検討したところ、典型例として、以下の３点が指摘できた。

①明治期から昭和初期にかけて本門佛立講系の諸教団では、宇宙（世界）は、「実相真如の妙理」として門流の伝統的教義で説明されており、生命言説は用いられていなかった。より具体的にいえば、当時の生物学や生命科学との応答は意識されておらず、また、機械文明への反発も看取されなかった。

更に、教化育成の場で語られる功徳・現証利益（仏果）の説明としては、信力に応じた仏力が顕現するとされ、実相真如の妙理との相即関係で説明されるものではなかった。つまり、伝統的な仏教教理を堅守する立場として、生命言説を「採用しない型」があることが判明した。

②次に、神道系の伝統宗教（黒住教・金光教・天理教）であるが、これらの教団においては「生命」という語彙は用いられていないが、豊饒と増殖繁栄をもたらす力として、「いのち」（和語）が用いられる傾向が強い。これは、先行研究でも指摘されているようにアニミスティックな農耕心性の系譜を引いている。明治期以降の生命言説との関係でいえば、機械的自然観への反テーゼとして主張される「生命（いのち）」の文脈が濃厚である。神道系の新宗教は、和語としての「いのち」の感覚を継承し、「生命」を語る傾向にある。

③上記の２例とは異なる型として、「法華会」の運動が検討された。法華会は、明治期において、物質文明に偏重した「西欧文明」の流入による悪風傾向に対する精神作興を企図し、在家日蓮主義者を核として発足した。発足当初から、法華会の中心メンバーは、在家の知識人を中心としたものであった。

法華会の教えの内容は、明治期における、西洋物質文明流入から起こる悪風に対する精神作興を通底としながらも、科学と信仰の関連、更には法華経本門における本佛と宇宙法則に関する考察など、西洋哲学を専門とした者の視点から法華経解釈が展開されている。

中核メンバーであった小林一郎(1876-1944)の言説には、明治末から我が国に受容された西洋思想（ベルクソンなど）の影響がみられた。その内容の特徴として、自然観、万物の法則観、法華経観、本佛観、本佛と衆生の関係性において、科学で解明されると思われる自然界の諸法則が、媒介として用いられ、科学的知識と法華経解釈の矛盾を解消するような展開が観察された。

さらに、大正初期において、「生命」というタームを用いてはいないが、生命論的な文脈で法華経の本佛を解釈していること。昭和期に入って刊行された『法華経大講座』に至り、積極的に「生命」の語を用い法華経本門における本佛思想を言説化していることが判明した。ここから、科学に対するアンビバレントな立場、すなわち、物質文明批判と最新科学における諸法則解明への期待があること。プラトンやライプニッツ、更にはベルクソンの「生の哲学」との応答が意識されていること。西洋の科学・哲学等を援用・活用しながら、宇宙に偏在する佛性（本佛）を説明しようとする、生命論が存在したことが判明した。ここには、生命言説に与しない立場や、民俗的な指向から生命を語る立場とも異なる、「最新」の哲学や自然科学との融合を意識した教説が浮かび上がってくる。

④これらの検討結果から、宗教運動において生命が語られる文脈としては、（ア）西洋の「生の哲学」を意識しながら教理を説明しようとする志向（科学志向型）と、（イ）反機械文明の文脈から「生命」を、民俗宗教性を説明するための概念として使用する志向（民俗志向型）に大別されることが指摘できる。

また、この２類型は、互いに参照し合う関係にもある。つまり、近代的で合理的な科学の文脈に乗りながらも、黙示的に民俗性を意味するのである。例えば、科学的であることを宣揚しながら、それが実のところ民俗性の

回復であるかのような関係性である。「生命」を「せいめい」と読ませつつ、「いのち」とも読ませたりする語感にそれが表われているといってよいだろう。

（２）新宗教教団では、生命はどのように語られてきたのであろうか。先行研究では、アニミスティックな農耕心性の系譜から、「生命」が語られてきたとされてきたが、教団の展開過程をふまえ検討したばあい、以下のことが指摘できる（事例として、立正佼成会、創価学会）。

「教え」の中核には、「生命」を民俗志向型の文脈で用い、豊饒をもたらす力として「生命」が語られる場面が多いが、教理の呪術性を合理化する過程で、積極的に「生命（せいめい）を使用する文脈が発見された。これは、新宗教教団のライフコースに応じて出現頻度が異なる。（ア）「生命」が反近代のコンテキストで言説化される場合、すなわち呪術性をもった教説として語られる場合と、（イ）近代に適合するために、すなわち社会への適応戦略として言説化される両側面が観察された。

（３）旧宗教と新宗教の生命言説の比較検討を通じて以下が明らかとなった。

「生命」は Life の翻訳語として我が国に導入されたが、多様な意味を含み込む概念として定着していった。この多義性こそが「近代」へのアンビバレントな応答態度を示していた。まず、応答しないという立場。次に、反近代への立場として民俗性との連続性を意識した文脈での生命言説。そして、親近代として、来るべき生命科学への期待感を込めた生命言説である。

このような複数の生命言説は、新宗教運動の展開過程において、ライフコースに応じて前景化したり後景化したりするものであった。

生命言説の複数の文脈が両義的に特定の教団に存在することの指摘は、これまで指摘されておらず、新旧教団宗教を実証的に研究することで、明らかになった知見として、極めて重要であると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 大西克明、「純粋在家の理念と在家主体主義−戦前期における浄風教会の展開と担い手たち」、『本化仏教紀要』第２号、2014 年、83−118 頁。査読無。

② 大西克明、「宗教運動の展開とその展望−日本社会の実証的研究に即して」、『東洋哲学研究所紀要』第 28 号、2012 年、171−184 頁。査読有。

〔学会発表〕（計１件）
① 大西克明、「近代における法華仏教と生命言説−法華会の事例」、日本宗教学会、2013 年 9 月 7 日、國學院大学。

〔図書〕（計２件）
① 大西克明『「九識説」とは何か―その起源と現状』、本化ネットワークセンター、2013 年、146−176 頁。

② 大西克明『地球文明と仏教』、東洋哲学研究所、2013 年、169−182 頁。

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
大西　克明（OHNISHI, Katsuaki）
東洋大学・東洋学研究所・客員研究員
研究者番号：３０４５９８３８

(2)研究分担者（０）

(3)連携研究者（０）